

2025年 新課程入試

2025年 新課程入試 概要決定！

文科省「入学者選抜実施要項の見直しに係る予告」公表！

旺文社 教育情報センター 2021年8月6日

文科省は7月30日、2025年(2024年度実施)の新課程入試について、(1)「入学者選抜実施要項の見直しに係る予告」、(2)「共通テスト実施大綱の予告」を公表した(以下、「見直し予告」、「共テ予告」)。

(1)は一般選抜、総合型・推薦型などの入試全般、(2)は共テの科目について示したものだ。これにより新課程入試の大枠が決定。これから大学は、それぞれ新課程入試の予告を出していくことになる。本記事では(1)について見ていこう((2)は近日公開予定)。

「見直し予告」のポイント

今回の入試改革は2021年入試と2025年入試の2段階ある。当初の構想は、第1弾の2021年は現行課程のままセンター試験を共テに変え、外検(英語の外部検定)、記述式、調査書を部分的に導入・改訂し、第2弾の2025年で新課程移行にあわせて全面変更というものだった。変更の規模は第2弾の方が大きい予定だったが、第1弾の失敗を受けて計画を修正。今回確定となった第2弾の内容は、入試制度としては緩やかな変更にとどまった。

■ 入試改革「当初構想 ⇒ 実際」 ■	
当初構想 ※1	実 際
2021年入試 〔入試改革 第1弾〕	【全 般】センター⇒共テに変更 ➡ 実装
	【外 検】共テに導入(共テ英と併存) ※2 ➡ 見送り
	【記述式】共テに導入(国数) ➡ 見送り
	【調査書】改訂 ➡ 実装

2025年入試 〔入試改革 第2弾〕	【全 般】新課程入試スタート ➡ 新課程入試スタート
	【外 検】共テ英語は外検に1本化 ※2 ➡ 外検は各大学の判断で利用
	【記述式】共テで科目拡大 ➡ 記述式は各大学の判断で実施
	【調査書】大幅改訂、電子化 ※3 ➡ 調査書は簡素化、電子化は今後

※1. 当初構想は基本的に「実施方針」(2017年7月)段階のもの。調査書については「実施方針」前後の構想を含む。
※2. 「共テに外検導入」の構想は途中で「成績提供システムの開発」に置き換わり、結局これが見送られた。
※3. 調査書の電子化は2023年入試から(だったのが見送られて、時期白紙となった)。

「見直し予告」の最大のポイントは「外検&記述式=大学判断」「調査書=簡素化」だ。以下に具体的に見ていこう（一部当方で加筆）。

●外検

- ・共通テストでの導入は見送り。
- ・大学は学部の特長や必要に応じて活用することが望ましい。
- ・大学は家庭環境や居住地域により外検の受験が困難な受験生に配慮。
 - ＞外検の非利用枠（外検不要の入試）の設定、得点換算での利用※など。
- ・大学は外検の活用について、その年の入試の基本事項を公表する7月末までに公表（ほかの資格・検定試験も同様）。
- ・大学は大規模災害等で外検が実施されない場合の代替措置についても検討しておくことが望ましい（ほかの資格・検定試験も同様）。

※得点換算は一般的に、外検を持っていなくても受験可能(大学が課す英語試験と比較して高得点を採用)。

●記述式

- ・共通テストでの導入は見送り。
- ・大学は可能な範囲で取り入れることが望ましい。
- ・記述式の目的として、次の2つの能力の評価を提示。「自らの考えを論理的・創造的に形成する思考・判断の能力」、「思考・判断した過程や結論を的確に、さらには効果的に表現する能力」(⇒空所補充で知識を問うような問題ではないということ)。

●公平性・公正性、入学者の多様性の確保

- ・入試における公平性・公正性の確保を改めて強調。
- ・大学は年齢、性別、障害の有無、国籍、家庭環境、居住地域など多様な背景を持った学生の受け入れに配慮。
 - ＞進学に困難を持つ受験生などを対象とした入試では、努力のプロセス、意欲、目的等を重視した評価を行うことが望ましい。
 - ＞その際、選抜の趣旨や方法について、社会に対して合理的な説明を行うこと、大学教育に必要な知識、思考力等も適切に評価することに留意。
 - ＞多様性の確保として「理工系分野における女子」を例示。
- ・大学は障害のある受験生に対する合理的配慮を充実。
 - ＞内容を決定する際は、受験生一人ひとりのニーズを踏まえた建設的対話を行う。

●調査書

- ・調査書は簡素化。原則、指導要録にあわせる。以下の点を改訂。
 - ＞「総合的な探究の時間の記録」欄
 - 【現】「活動内容」と「評価」を学年ごとに文章で具体的に記入。

【新】「学習活動」と高校で定めた評価の「観点」を記入。生徒に顕著な事項がある場合は「評価」を端的に記入（★簡素化★ 指導要録にあわせる）。

> 「特別活動の記録」欄

【現】委員会名や係名などの活動の内容と、その所見を文章で記入。

【新】活動（学校行事、HR など）ごとに高校で定めた「観点」を記入。十分に満足できる場合に○印を記入（★簡素化★ 指導要録にあわせる）。

> 「指導上参考となる諸事項」欄

【現】学年ごとに6つの項目（「学習における特徴等」など）について記入。

【新】学年ごとに1つの欄とし、要点を箇条書き（★簡素化★ 指導要録にあわせる）。生徒の特徴・特技、学校外の活動などは、指導要録の内容を精選して記入。

> 大学は「指導上参考となる諸事項」以外の記載を求めることができたが、これを廃止（★簡素化★ 指導要録にあわせる）。

> 学部等が求める能力に関して特に推薦できる生徒について、大学は「備考」欄に記載を求めることができたが、これを廃止（★簡素化★ 指導要録にあわせる）。

> 特定の分野（保健体育、芸術、家庭、情報等）で特に優れた成果を収めた生徒について、大学は「備考」欄に記載を求めることができたが、これを廃止（★簡素化★ 指導要録にあわせる）。受験生本人から資料を提出させることに。

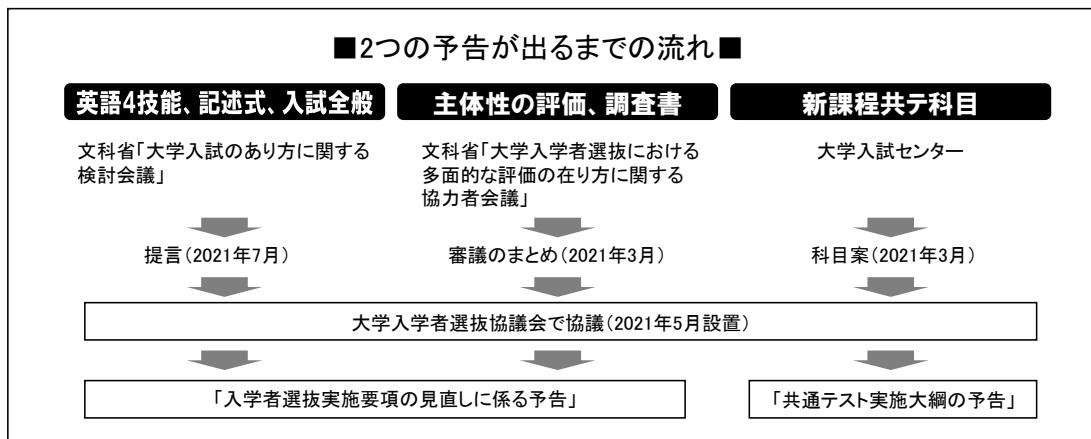
> 学習成績概評の「マル A」を廃止（★簡素化★ 指導要録にあわせる）。

> 枚数制限の撤廃を撤廃。両面1枚に戻す（★簡素化★）。

> 観点別学習状況の記載は見送り（指導要録＝導入、調査書＝見送り）。

解説

「見直し予告」も「共テ予告」も、それぞれ入試改革第1弾で課題が残った英語4技能、記述式、主体性の評価、さらに新課程の共テ科目について、文科省の有識者会議や入試センターで検討がなされ、そこでの取りまとめをベースにしている。



入試改革第1弾のときも2017年7月に「見直し予告」が出された。しかし前回と今回で「見直し予告」のテイストはかなり異なる。前は10ページに渡って日本の大学入試が抱える課題や、改善の趣旨まで含めて変更の内容が示された。今回は主な変更点が2ページあるだけだ(あとは入学者選抜実施要項イメージ案の新旧対応表、調査書の参考様式など)。

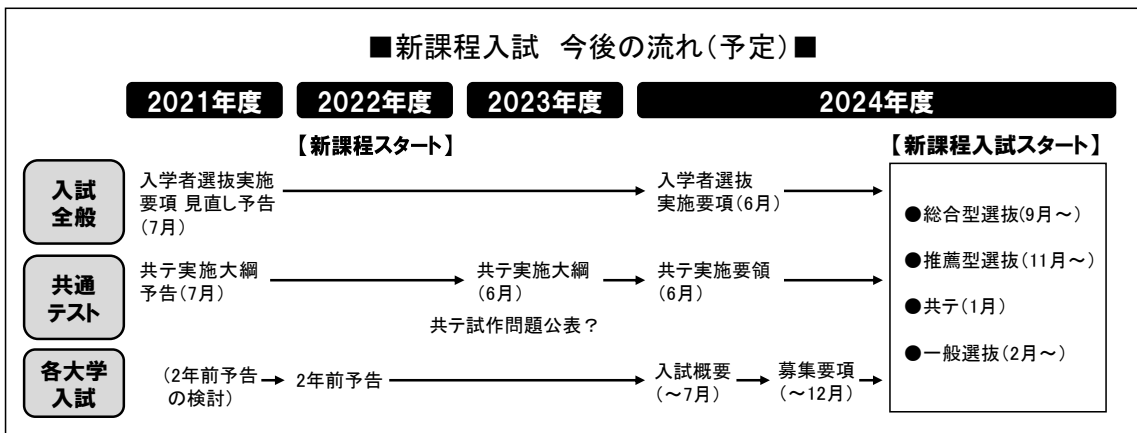
第1弾のときは、「見直し予告」から改革の意図や重要度が読み取れたが、今回はそれが難しい。主体性の評価にいたっては、かつての意気込みはまったく伝わってこない。これらの点については、有識者会議の取りまとめを参照してほしい※。

※「[入試のあり方検討会議の提言](#)」⇒[2021年7月16日記事](#)を参照。

※「[多面的な評価の在り方協力者会議の審議まとめ](#)」⇒[2021年4月5日記事](#)を参照。

また、この有識者会議の取りまとめには、「見直し予告」に盛り込まれていない事案もある。「見直し予告」では外検や記述式の導入は大学判断とされたが、取りまとめでは、導入した大学にインセンティブを付与することが提言されている。つまり運営費交付金や私学助成に反映される可能性がある。大学にとっては今後の注目ポイントになる。

入試制度自体は緩やかな変更だが、入試科目は大幅に変わる。これだけでも非常に大きな変更だ。これから大学は1年かけて「2年前予告」を検討していくことになる。入試改革第1弾のときは国の方針が不透明だったこともあり、各大学の予告は「第〇報」が小出しで続き、非常にわかりづらかった。今回は1発で明確に出してほしい。



入試改革の当初の構想は、「急激な社会の変化の中で日本が取り残されてしまう、従来の教育、入試に対する危機感」が根本にあり、2021年の第1弾と2025年の第2弾をあわせて戦後最大とも言える大規模な改革が計画されていた。しかし強硬に押し進めた結果、社会の反発を招いて第1弾は失敗に終わった。

仕切り直しとなった今回、根本にあるのは「誰もが納得感のある、実現可能な入試」といえる。その結果、第2弾は緩やかな変更にとどまった。反対意見はそう出ないだろうが、当初構想で指摘されていた現状入試の問題点は置き去りになった印象だ。今一度、当時の議論を振り返ることも必要だ。

(2021.08 石井)